

## 第5章 教室環境づくり、保護者との関係づくり

第4章では、学級経営の核である「学級づくり」について、私の考えをお伝えしました。本章では、その他の「条件整備」のなかで、現場の先生からの質問などが多く寄せられる「教室環境づくり」「保護者との関係づくり」の2点を取り上げます。

ここでも、みなさんに紹介したい理論と技法を織り込んでいます。

### 教室環境づくり

各地の学校を訪問し、授業を参観すると「子どもたちが学びやすいのだなあ」と感じる教室があります。これらの教室では、特別支援教育に関する研修や書籍のなかで見聞きすることの多い「教室環境づくり」の具体方策が効いていると感じられます。もちろん、学校や学級の実状が異なるゆえ、以下のすべてが同様に活用できるとは言い切れませんが、試してみる価値は十分にあるでしょう。

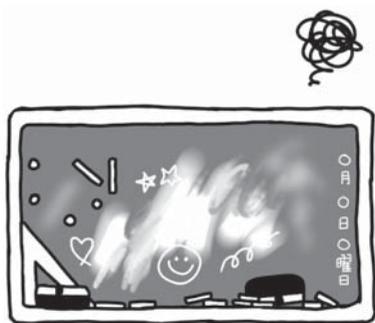
#### (1) 黒板周りをスッキリ

黒板の周りに画びょうで留めたたくさんの掲示物が貼ってあった

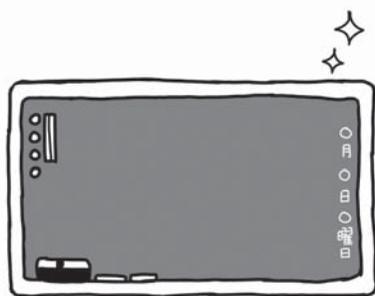
り、黒板の横のカラーボックスの上にCDプレイヤーやノートパソコン、CDなどが乱雑に置かれてあったりする…。そういう教室環境を目にすることがあります。また、授業でノートに書き写す用語や文章とは無関係の、さまざまな連絡事項が書いてある黒板を目にすることもあります。「まるで自分の若い頃の教室を見ているみたいだ」と、懐かしいながらも恥ずかしい気持ちになる私です。

学級のほとんどの子どもにとっては、そうした「雑然とした」環境もそれほど気になるものではないでしょう。しかし、「気になる子」のなかには、「雑然」から必要なものを取り出して「見る」ことが苦手な子がいます。

私たちは、カクテルパーティのように人の会話や音楽が流れる「雑然」としたなかであっても、誰かに名前を呼ばれれば、そちらに注意を向けることができるでしょう。そのことを、「カクテルパーティ現象（効果）」あるいは「選択的注意」といいます。しかし、ADHD（注意欠如・多動性障害）やASD（自閉症スペクトラム障害）のある子や、その傾向のある子の場合、カクテルパーティ現象（効



乱雑黒板



すっきり黒板

果)が弱かったり、うまく働かなかったりして、ある物事に注意を向けにくい(選択して注意を向けにくい)状況が生まれることがあります。それゆえに、ダラダラとした長い説明ではなく、スリムな説明や、すっきりした黒板周りが大切になるということです。

「気になる子」にとって大切な、スリムな説明やすっきりした黒板周りは、周りの子にとっても「余分」「不用」というよりは、むしろよりよく情報を受け止めることにつながるのではないのでしょうか。つまり、万人向け、ユニバーサルな働きかけであるといえるでしょう。

## (2) 机の上をすっきり

机の上に何本も鉛筆を並べたり、消しゴムのかすで遊んだり、授業中ずっとペン回しをしていたり…。こうした「気になる子」に対して、「注意してもなかなかやめることができないので、どうしたらいいのでしょうか?」という質問を受けることがあります。そうしたとき、私が一例として紹介しているのが、三重県のA小学校の働きかけです。

A小学校では、5年に及ぶ実践研究を経て、通常学級における特別支援教育推進に向けた「授業づくり3原則」を次のようにまとめ上げました(曾山、2014)。

### A小学校の「授業づくり3原則」

#### ①学習規律の徹底：

- ・机上には何も出さず、そのとき必要な物を、必要なときに素早く用意する